

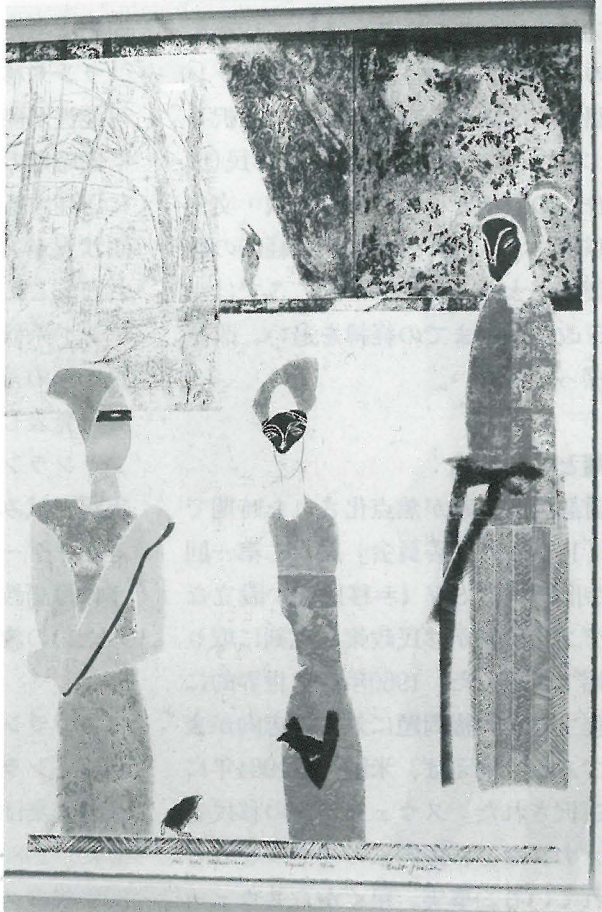
発行所(郵便番号106-0032)
 東京都港区六本木6-11-9
 スウェーデンセンタービル5階
 社団法人スウェーデン社会研究所
 Tel 03 (5412) 0503
 Fax 03 (5412) 0549
 編集責任者 岡 沢 憲 芙
 印刷所 関東図書株式会社
 定価400円(年間購読料四千元)
 1998年11月25日発行
 No. 307 第30巻 3・4・5合併号
 (毎月1回25日発行)
 昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

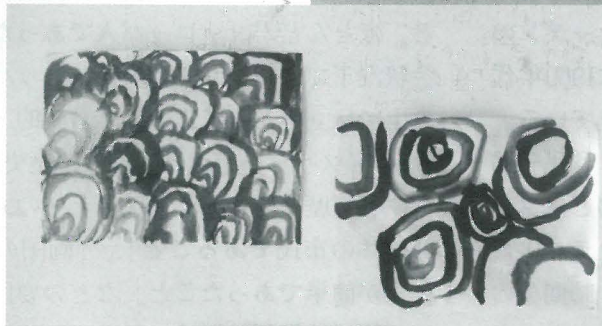
No. 307 Bulletin Vol. 30 No. 3・4・5合併号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
 (The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
 Sweden Center Bldg. 5th floor, Roppongi, Minato-ku, Tokyo, Japan.

ベリット・ヨンスヴィーク▶
 の作品(1997)



撮影:大橋 和子(おおはし かずこ)
 昨年1年間、ヨーテボリ市のコン
 ストエピデミンに滞在。滞在中作品を作
 制。現地にて展示会も開催しました。



◀大橋和子作品(部分)

目	次
巻頭写真.....	1
ホームランゲージ改革採択の背景.....	2
お詫びと訂正.....	3
写真展「ダーラナ・緑の風につつまれて」後記.....	4
スウェーデン環境ニュース.....	5
「スウェーデンにおける男女平等教育に関する 実証的研究(1)」について.....	6
	7
作業療法士って何をする人ですか?.....	7
Kultur Klippet (文化便り).....	10
ジャパンカレンダー.....	11
大使館の催しより.....	12
インフォメーション.....	13
書籍他ご紹介.....	14
シリーズ エレン・ケイ(2).....	17

ホームランゲージ改革選択の背景

山崎 由喜代

Ms. Yukiyo Yamazaki

スウェーデンの移民問題は言語問題と言われてきたが、それにはフィンランド移民の存在が大きく影響している。移民子弟に対する母語教育が、週2時間というささやかさではあったが正式に始まったのは1960年代終わりである。そして1976年に「まず母語の習得を」という主旨のホームランゲージ(=母語にほぼ同義)改革が国会で採択された。その後、スウェーデンにやって来る移民(広義に難民も含む)の急増と移民の出身地域・文化・民族等の多様化、さらにスウェーデン経済の悪化もあって、環境が大きく変化した。ここではホームランゲージ改革採択までの経緯を追い、改革成立の背景を探ってみたい。

母語教育の発端と1960年代:

1960年代は言語教育問題が焦点化された時期であると同時に「1964年外国委員会」設立、第一回移民受け入れ制限実施、SIV(=移民庁)設立など、スウェーデン当局側が移民政策に真剣に取り組み始めた時期でもあった。1960年代は世界的に多様性、多文化主義、人権問題に対する志向が表出された時期である。例えば、米国では1964年に新公民権法が選択された。スウェーデンの移民者政策は米国、カナダなど移民国家のモデルを参考にしたと言われている。事実、早くからスウェーデンの外国人問題に着目していたスウェーデンの移民学の第一人者、T.ハンマー博士は1960年代前半の米国の移民問題を目のあたりに見ている。

移民子弟に対する母語教育の発端は、移民子弟の学業上の困難にあった。それらの子弟とはフィンランド移民子弟であった。まずボランティアによる手当が試みられた。1958年には週4時間分の特別授業のための国庫補助金が出るようになった。目的はスウェーデン語習得と教科内容を理解させることだった。1962年には7年生及び8年生に在籍するフィンランド移民子弟のために、母語保持を目的としたフィンランド語が選択科目として履修可能となった。1966年にはユネスコの「パナキュラーに関する勧告」(スウェーデンは1953年に

署名)の基本的見解を採用した報告書(SOU1966:45)が提出され、翌1967年にはユネスコ教育差別反対条約に署名している。そして1969年に週2時間というささやかではあるが、初の母語教育が始まったのである。この時も主たる対象はフィンランド移民子弟であったが、他の言語集団にも可能性が開かれていた(Lgr69)。

同時期の1960年代中頃より、北部スウェーデンに居住するフィンランド語系スウェーデン人の言語状況が「半言語」状態にあるという報告がなされた。この報告を受けて1970年代前半に、フィンランド系研究者が移民集住地域のフィンランド移民子弟の言語状況を調査し、同様な傾向が見られると発表した。同じ1970年代前半、同様な地域でフィンランド移民子弟のための母語媒介クラスの実験が試みられた。このような経過を経て、ホームランゲージ改革が選択されたのである。このように母語教育はフィンランド移民対策、その子弟のための教育対策であったのである。

フィンランド移民の果たした役割:

フィンランド移民は1960年代に急増し圧倒的最大の移民集団となった。1969年に流入がピークに達した。1980年代からは次第に減少していった。1960年代のスウェーデン社会の移民構成内容を見ると、ほとんどがヨーロッパ人であった。当時の社会状況下では、彼らは他のヨーロッパからの移民の中で目立ったのである。「言語的・民族的異質性」、「スウェーデンとの過去の歴史的繋り」、換言すれば歴史的アイデンティティの共有、「北欧共同体の市民であること」、「両国の距離が近く往来が簡単であったこと」などの要因が以下のように複雑に相互に関連、補強をし合い、その結果、フィンランド移民がスウェーデンの移民問題の中心となったのである。

地理的に近いこと、北欧共同体のメンバーであることはスウェーデンへの往来を自由にし、彼らを圧倒的最大の移民集団にした。その結果家族連れも少なくなかった。このような状況の中で、フィ

ンランド移民子弟は母語とは異質なスウェーデン語で教育されることに、他の移民子弟より一層障害を持ち、感じたことであろう。

スウェーデンの支配下にあったという過去の歴史は、彼らに引け目意識を持たせた。かつてフィンランドではスウェーデン語を話す者は支配側、フィンランド語しか話せない者は被支配側だった。このことは、教育問題として始まった言語問題がフィンランド移民によって「民族問題」としてとらえ直され、歴史的アイデンティティの共有意識を背景にスウェーデン政府に対して他の移民集団とは違うマイノリティとしての特別な地位を要求する運動を展開することに繋がった。フィンランド本国政府も彼らを後方から支援した。フィンランドは自国内のスウェーデン語系に母語での教育を保障し、スウェーデン語を国語の一つにしている。北欧共同体内で唯一異質な言語を国語とするフィンランドが、北欧共同体のメンバーとしての絆を強く保つため、またスウェーデンでフィンランド移民子弟の母語教育を保障してもらうため、という政治的意味合いがあると考えられる。

元来新着労働移民は同郷出身者同士で集住する傾向があるが、フィンランド移民が目立つほどに集住したのは、その他に1960年代の社会状況下での彼らの異質性、スティグマ意識に起因する「受け身の自己隔離」(Kuusela, 1973)、最大集団であること、1960年代の「百万戸計画」などによるものである。スティグマ意識は、多くの者が田舎出身者でありスウェーデンで初めて都市生活の体験

を持ったことから生み出されていた。集住はフィンランド語という言語共同体を生み出した。

スウェーデンの意図：

北欧共同体を守るため、平等と協調を重視する「国民の家」を維持発展させるために、フィンランドからの労働力安定供給は望ましいものであった。フィンランド移民子弟に対する母語教育の保障には彼らをスウェーデンに招くという意図と、さらに将来的帰国を促進するという意図もあった。それは他の移民集団に対しても同様に期待されたことである。

まとめ：

スウェーデンは民族的同質度の高い社会、平等を追求する社会でもある。同質化と平等化が重なれば「経済」効率が高い。スウェーデンは北欧の中で先住民族の権利を認めるILOの条約に調印していない(1994年現在)が、これは何を物語っているのだろうか。フィンランド移民が要求するマイノリティとしての特権を回避するため、国家の言語の経済性(クルマス, 1993)を守るため、つまり自社会の存続を語るため、フィンランド語に特権を与えてはならないと判断したのである。ホームランゲージ改革採択によって、母語教育を要求するフィンランド移民とその本国に敬意を払い、その一方で母語教育を他の移民言語集団にも拡大することによって「民族問題」を移民問題として吸収しようとしたのである。

おわびと訂正

No. 306号に訂正がありました。執筆者をはじめ、関係各位にご迷惑をおかけいたしました。ここに訂正のうえ、深くお詫び申し上げます。

「21世紀も人間は動物である」

(1) 9ページの左側 上から21行目

「っているのは窒素酸化物と一酸化炭素の大気中の」→「硫黄酸化物」

(2) 9ページの左側 上から23行目

「国際的には、UNEPS で出」→「UNEP」

(3) 10ページの左側 上から18及び19行目

「数百年前」→「数百万年前」

(4) 10ページの左側 上から27行目

「自然の大きさに比べて、人間の大きさが大き」→「人間活動の大きさ」

「エレン・ケイ『児童の世紀』から100年」

(5) The 100 Years from “The Century of child” (by Ellen Key)

下線部が小文字になっていました。“The Century of Child” (by Ellen Key) が正しいスペルです。

(6) 16ページ左上の写真のキャプションと右上のキャプションが入れ替わっていました。

(7) 15ページ右段9行目

どうしてもエレン・ケイあたりから解き起こし→どうしてもエレン・ケイあたりから説き

(8) 16ページ右段16行目

分かってくる。からだ。→分かってくるからだ。

写真展「ダーラナ・緑の風につつまれて」後記

去る9月13日～9月30日、及び10月13日～10月31日と2回にわたり当研究所事務所の一角にて写真展を行いました。

今回のテーマは、スウェーデン人の心の故郷と呼ばれ今もなお民族伝統が色濃く残る、スウェーデン中部ダーラナ地方の夏至祭をテーマに取り上げました。また新聞社や雑誌に告知されたおかげで各方面の方々に足を運んで頂き、盛況のうちに終える事ができました。今回写真展を開催するにあたり、クラスボルスジャパン(株)のご協力を得て、スウェーデンの自然から生まれた麻織物を快く提供頂き、よりスウェーデンの雰囲気が盛り上がりました。ここに深く感謝申し上げます。

皆様もご存知のようにクラスボルスの麻織物は、現在はスウェーデンの家庭のみならず世界中のホ

テル・公共施設などで使用されております。また、毎年開催されるノーベル賞晩餐会をはじめとして公式行事のテーブルを飾り、さらに1970年代末からスウェーデン王室でも愛用されている由緒ある麻織物です。

また、大阪芸術大学美術学部副手であるタカハシトモさんには、今回の展示会のために多面に渡りご協力頂きました。紙面をかりてお礼申し上げます。

さてここに、展示中に配布したパンフレットの記述の一部を抜粋して下記に紹介したいと思います。

主催/dill communication

文：松元さぎり (Sagiri Matsumoto)

写真：中嶋 千絵 (Chie Nakajima)

◇スウェーデンの風物詩・夏至祭をみて◇

スウェーデンの夏は短い。それ故に夏の訪れを祝う夏至祭は、とりわけスウェーデンの数ある伝統行事の中でも最大のものだ。1年の約半分を暗く、寒く、そして長い冬を体験しているからこそ、待ち焦がれていた夏を迎える喜びはひとしおである。

夏至祭の最大の見せ場であるメイポールとは、草花で巻かれた白樺の木である。

5月のスウェーデンは夏と呼ぶにはまだふさわしくない季節であり、現在ではメイポールという言葉だけが残ったのだと思う。～中略～

6月に入るとそれまでの憂鬱な季節が嘘の様に太陽が輝き、爽やかで心地よい風が吹き、草花が辺り一面に咲き、そして人々までがいつまでも沈むことのない白夜の如くざわめき始める。まるで映画のワンシーンを垣間見ている様な、人々と季節の見事なほどの変わりようは客観的に眺めていると面白い。太陽の暖かさやたんぽぽ畑の黄色一面の景色を見ているだけで幸せに感じるほどである。～中略～

スウェーデン中部ダーラナ地方のレトビックは、首都ストックホルムから電車で約3時間半である。夏至祭はスウェーデン各地でも行われるが、私が長年レトビックにこだわり続けていたのは、何百年と忠実に受け継がれている伝統ある場所で、という思いからであった。「典型的な」と形容できる美しいダーラナ地方の自然は、スウェーデン国内のみならず世界中からの観光客を集めていた。



花冠と民族衣装をまとった少女

民族衣装をまとった人々が馬車に子供達を乗せ、バイオリンやアコーディオンを奏でる楽士の登場で夏至祭は始まる。メイポールを立ち上げた瞬間、夏至祭はクライマックスに達し、その後子供も大人もメイポールを囲み輪になって踊りを楽しむ。～中略～

また夏至祭前夜は、不思議な魔力が潜む日であると考えられており、様々な言い伝えがある。白夜の中人々は体全体で喜びを表し、過ぎ行く短い夏を堪能する。そして、夏至祭を過ぎると再び日は短くなる。あっと言う間の夏なのだ。

自然を敬い、自然と共存してい

る国スウェーデンは期待を決して裏切らない、いやそれ以上の国である。

※dill communicationは、主にスウェーデンを中心に、心のふれあいを重視した文化交流をアート、写真、エッセイを通じて行っています。

今後は、スウェーデンを初めとする北欧の魅力をさらにたくさんの方に伝えられるよう活動の範囲を広げていきたいと考えておりますのでご期待下さい。

今回展示しました写真や絵はがきに関するお問い合わせやご注文は下記までお願い致します。

～連絡先～

〒340-0022

埼玉県草加市瀬崎町108-9 LM309 dill com 係

Tel/Fax 048-687-2532

E-mail ; Juliet7609@aol.com

スウェーデン環境ニュース

1998年 3月号より転載

スウェーデンのダイオキシン問題

ポリ塩化ビニール（塩化ビニール）がごみ焼却炉で焼却されダイオキシンの発生源になると日本で問題になっている。では、スウェーデンはどうだろう。スウェーデンのダイオキシン騒ぎは1980年代に盛んだったから日本よりずっと早かった。今のスウェーデンではあまり議論されていない。

しかし、スウェーデンで一番注目されたのは国を支えている産業の一つであるパルプと製紙業界だった。パルプや紙を塩素を使って漂白し、排出する水にダイオキシンが含まれていたからです。製品の中にも少量のダイオキシンが検出された。グリーンピースや自然保護協会などの市民団体がキャンペーンを張って、消費者が無漂白の製品を求めるように誘導し製紙業界の在り方を変えることに成功した。

スウェーデンは1980年からパルプと製紙産業の有機塩素化合物（ダイオキシンなど）の排出を90%減らしている。ゴミ焼却炉からのダイオキシンも同じぐらい抑えることが出来た。（環境保護庁）

ごみ焼却についてはダイオキシンの問題が分かった時にまず新しい焼却炉の建設を一時的に中止し原因を調査した。そして、今のスウェーデンでは焼却温度の安定化などの技術でダイオキシンの発生を抑えることが出来ると分かったから焼却の仕方が焦点になっている。もう一つ力をいれているのはごみ発生源での分別とリサイクル。焼却炉に入れる廃棄物の種類を、ある程度、コントロールをしようとしている。また、焼却炉はただのごみ処理ではなくエネルギー源としても考えている。最近、エネルギー関連会社も廃棄物処理業に取り組んでいることは珍しくない。

スウェーデンのダイオキシン議論はほとんどインターネットが始まる前のことだからインターネット上はあまり情報がないことも分かった。

塩化ビニールに含まれている

「環境ホルモン」フタル酸エステル類

スウェーデンはこの数年、塩化ビニールの問題を注目している。しかし、スウェーデンの議論の焦点になっているのは、塩化ビニールに柔らかさや弾力を出すために加えられている「可塑剤」の一種「フタル酸エステル類」。これは日本で「環境ホルモン」と呼んでいる物質の一つです。食品などに接する塩化ビニールからは少量のフタル酸エステル類が漏れる。そのため、1990年からスウ

ェーデンで生産されている容器包装類（特に食品用のもの）には塩化ビニールを使用しないことになっている。

現在一番問題にされているのは3歳以下の子供が舐めたりするような塩化ビニールのおもちゃ。そのことについてはグリーンピース・ジャパンがキャンペーンをはじめているから多くの日本語の情報を提供している。スウェーデンやデンマークでの経緯の一部も日本語になっている。

(Tel. 03-5351-5400)

<http://www.nets.ne.jp/GREENPEACE/>

グリーンピース・スウェーデンが最近取り上げているのは、スウェーデンのマクドナルドが子供のお客さんにあげている塩化ビニールのおもちゃ。マクドナルドはグリーンピースの指摘を騒ぎ過ぎだと言っている。しかし、対策を真剣に考えているのはグリーンピースだけではない。デンマークの環境大臣は小さい子供のおもちゃでのフタル酸エステル類の使用を禁止する法律を準備していると発言している。（日刊紙DN98/12/30）

あらゆる商品に対する生産者責任の分野別の導入政策を担当しているスウェーデン政府のエコサイクル委員会はフタル酸エステル類など有害な添加物質を含んだ塩化ビニールを2000年までに廃止するべきだと政府に提案をしている。フタル酸エステル類は、環境保護庁が使用を限定しようとしている13物質の一つでもある。

EUも真剣に取り組んでいる。EUの環境・エコ毒性・毒性問題の科学委員会（Scientific Committee on Toxicity, Ecotoxicity and the Environment）はフタル酸エステル類の問題を調べた結果、98年3月9日に「ポリ塩化ビニールのおもちゃベビー用品からのフタル酸エステル類漏出に関する意見」（Opinion on phthalate migration from soft PVC toys and child-care articles）を発表した。この委員会は欧州委員会から、この問題について研究を委嘱されていた。委員会はフタル酸エステル類に関するおもちゃの安全基準の早急な設定を提案している。なお、委員会は問題を引き続き研究することを決めた。

(<http://www.europa.eu.int/en/comm/spc/sub7.html>)

発行／編集：Lena Lindahl（レーナ・リンダール）

協力：(社)スウェーデン社会研究所

情報源：環境保護庁、産業技術開発庁、

議会データベース、最大日刊紙ダーゲンス・ニーヘテル（DN）他

年10回ファックス発行、年間購読料5,000円

問い合わせ先：電話／ファックス：03-3422-7019

「スウェーデンにおける男女平等教育に関する実証的研究(1)」について

九州工業大学教授 松浦 勲

Prof. Isao Matsuura

周知のように長年続いている社会民主主義政策の基本理念は、「正義・公正」であり、それが「教育」のなかにどのように生かされ、実践されてきたかを明らかにするのが我々の目的であった。具体的には、第1に現段階の男女平等教育の政策とその実施方法をみるために、諸機関の専門家たちへのインタビュー調査と、第2にスウェーデンにおけるこれまでの男女平等教育の効果をみるために大学生への意識調査（青年たちのジェンダーに関する意識、離婚、再婚、ワンペアレントに関する意識）を行った。調査時期は1995年9月である。この調査において、三根子・Von Euler氏の大変な助力を得た。

1) 男女平等教育政策、実施についての聞き取り調査

我々が聞き取り調査を行ったのは、学校庁、小、中、高校の校長、教師、大学の研究者であり、主要には最新の学習指導要領（1994年版）における男女平等教育の内容、実践方法についてであった。1980年代までの男女平等教育を論じた松崎巖は「教育における平等は進んでも、教育をどうしての平等は不十分」としているが、1995年段階ではどうであろうかというのが我々の基本的な視角であった。学校や教育環境を平等にする試みとして、男子校、女子校の廃止、男女共通のカリキュラム、教師の性別構成などは政策においてすでに達成されていたが、進路選択、職業選択において、ジェンダー視点によるステレオタイプによらない決定ができる環境作り、職業、社会的役割における男女のかたよりを学校教育段階から是正していくとくみにおいては様々な試みがなされている。現実には1993年においてなお、教科におけるジェンダー（女子文系、男子理系へのかたより）がみられ、そのことが、職業選択に影響し、女子が選択する職業は社会的賃金の低さに連動することなどを提起し、それを学校教育において、是正する方法として、教師養成の段階から、男女平等、ジェンダーに関して積極的にかわりをもつ教師の養成、などきめ細かい配慮がなされていることが学

校庁、ストックホルム教育大学などでの聞き取りでわかった。以下の2)、3)にも共通しているが、男女平等教育において、ジェンダーか、生得差かの議論が国民全体に定着しているとはいえないこともかわった。

2) 保育園聞き取り調査

1975年に目にした新聞記事に、スウェーデンでは保育園の段階から男の子、女の子と区別しない保育を心がけているとあり、それ以来、この国の性役割の状況に関心を抱いてきた。今回、4つの特徴的な保育園で聞き取り調査を行った。調査の中心は、男女の性役割の固定化を防ぐための取組についてであった。それについては、どの園も男女同じ活動を心がけているということであった。しかし、園では女性的な活動が多すぎるという親からの不満があるので、できるだけ保父を雇用する努力をしているが、賃金が安いあまり効果があがっていない。保育園以外の教育機関でも女子にとっての不利な面をサポートする努力がきめ細くなされており、環境の与える影響についての配慮がゆきとどいている。

しかし地方で、園長たちから男の子はエネルギーがあるからとか、男の子は女の子とはちがうのだからとの言葉が聞かれ、性差における生得的なものを強くみる発言が共通にみられた。2人の園長から、「性役割の差をなくそうとする70年代の運動は極端であった。その結果、男の子に人形を与えてもそれを車のように床を走らせようとしたりして、その試みは失敗した、あとでそれについて研修をうけた」と聞いた。

全体として、保育園における伝統的な性役割を改善しようとする動きと生得的な性差を無前提的に受け入れる態度とが錯綜しているように思われた。他の文献からみても1980年代に社民党のSex Role Approachの考え方にたいする批判が生じ、性役割は予想以上に固く人々の頭をとらえているといわれている。そのことは3)でみる大学生の意識にも反映しているようだ。

3) 理系大学生の意識調査

理系大学生96名にアンケート調査を行い、部分的に日本の大学生と比較した。性役割に関する自己評定の結果については、日本の女子学生が伝統的な性役割からの脱却が窺えるのに対して、スウェーデンの女子学生については伝統的な性役割がみられた。この点は今回の対象者がエリートに属する人達であったことから、今後一般的な青年たちの意識の把握が必要であるしこの調査のみでは判断は出来ない。

しかし、今回の限られた調査においても、将来、家事、育児にどの程度関与するつもりかの問いに対して、男子学生の関与意識も相当高かった(85

%)。このような行動レベルについては教育効果もあがっているといえようか。

限られた枚数では我々の報告が十分に展開できないので、全体に関しては、『九州工業大学研究報告、第45号、人文、社会科学』を読んで頂けたら幸いです。

以下が今回の原稿のもとになった文献です。

松浦勲・大村恵子共著

「スウェーデンにおける男女平等教育に関する実証的研究(1)」

『九州工業大学研究報告(人文・社会科学)第45号』平成9年

作業療法士って何をする人ですか？

ルンド大学総合病院 作業療法士 河本 佳子

Occupational Therapist Ms. Yoshiko Komoto

私はスウェーデンで作業療法士(O.T)をしています。この質問を日本でもスウェーデンでも度々受けます。

作業療法の定義としては、患者の作業遂行能力を回復、強化、高揚させ、さらに適応と生産性に必要な技術の学習を促すもの。また、病状を軽減させたり、矯正、健康の増進・維持をさせる科学的技術である(Lorrain Williams Pedrettiの要約)としてあります。

これを読んでも仕事内容を把握するのはむずかしく、分かるのは作業療法士本人か、日頃作業療法に係わりあいのある人くらいでしょう。それで、少々無理矢理考え出した気来はあるのですが、作業療法士とは、患者が病気の状態から社会や日常

生活に復帰するための帰路を準備し、訓練し安全に道案内していくコーディネーターだと考えて下されば良いと思います。一步誤れば、患者もろとも、迷子になりかねません。そう考えると責任も重大で身も引き締まりますが、私の勤めるマルメの大学総合病院の一画にあるハビリテーリング・センターでは、患者を軸に医療チームが回りを取り囲み、患者の主旨を尊重しながら共に歩む方法をとっています。だから患者の一步は医療チーム全体の感動につながり、毎日の勤めが実は楽しくて仕方がないのです。

このハビリテーリングセンターは、0才-20才乳幼児・青少年を対象にしたリハビリセンターで、マルメ市(自治体)或いは近辺在住の知的・身体障害者が通院するセンターです。

対象者の主が先天的障害者なので、後天的な二次障害者の復帰を意味する“リ”は省いて、“ハビリ”即ち“適応/順応させる”センターと考えて下されば良いでしょう。このセンターについては、機会があれば折々紹介したいと思っています。

さて97年秋、脳性マヒを患っている34才のジャーナリスト/映画監督ラス・ムルバック氏が、スウェーデンの障害者福祉を痛烈に批判して、医療界をあっと言わせました。

彼はハンガリーのブタペストにあるペトゥー教



リハビリテーリング付属の保育園
補助器具を使用して遊ぶ子供達

います。

スウェーデンの医療福祉システムはもちろん完璧ではありません。批判される箇所はいくらでも出て来ます。日本にさえ劣る面がたくさんあるのも知っています。でもここには弱者も人間の尊厳に生活できる可能性があるのです。ムルバック氏のように重度障害を持ちながらも映画監督になれ、世間に受け入れられる寛容な社会があるのです。

また、マリアの両親が二カ月の休暇を取って治療に出掛けられるだけのサポートと経済援助があり、自分の主張や希望が取り入れられる医療福祉システムがあるのです。もちろん全ての権利が天から降って湧いて来るわけではありません、各々個人がそれぞれ必要に応じて獲得していくのですが、その道への門は叩けば必ず開いてくれます。このようにあらゆる可能性があり順応性のあるのがスウェーデンシステムです。それを更により良くしようと皆が努力しているわけです。ムルバック氏の今回の批判もきっと取り入れられて、今以上に飛躍していくのではないのでしょうか。

こんな風に向向していくシステムの中の微々たる一部ですが、それに作業療法士として携わってられる私は、ますます責任重大で心新たにしなければと思うこの頃です。

追記

ジャーナリストであり映画監督でもある34才のラス・ムルバック氏が、スウェーデンの医療界にセンセーションを巻き起こしたのは前にも述べたが、つい今月の理学療法士組合から出版された月刊誌にも彼の事が大きく取り上げられていた。

ムルバック氏の事というよりも、彼の啓蒙するペトウー教育をいかにしてスウェーデンのリハビリに受け入れて行くかという、誌面上で見当している前向きな姿勢が伺われた。一番手酷い非難を浴びた理学療法士の人達が、弁解するでもなく、ペトウー教育の教育指導方法の是非を見極めようとしている。

アンドレ・ペトウー氏はハンガリーで生まれ、医者としてウィーンの病院で働いていたが第二次世界大戦後母国に戻って脳性マヒのリハビリを始めた。当時ハンガリーでは歩けない子供は教育を受けられないという苛酷な差別があり、普通の知能を持ちながら学校へ行けなかった子供が多かったそうだ。終戦後で全てに於いて貧しく、家具さえ無い状態、まして補助器具などあるはずがない、訓練用には木工で造った椅子とベンチだけ使った

そうだ。

彼が子供達に要求したのは、一にも二にも訓練と努力だけで一日の生活の中に目標の動作を織り込んで強要したらしい。きっとそこには涙と悲痛な叫びがあったのではないかと思う。でもそのおかげで子供達は学校へ通えるようになった。あまりの効果に訓練を望む家族が殺到し、一躍有名になったそうだ。ペトウー氏は自分の訓練方法をセラピーとは呼ばない、あくまでも教育方法であると言っている。彼が1967年に死んだ後もペトウー施設は増え、Conductive Educationとしてペトウー教育を教える大学から卒業生を出している。

月刊誌にはこのペトウー教育を研究テーマにして特殊教育を勉強した理学療法士と作業療法士の人が当ハビリテーリングに居ると書いてあった。

灯台墓暮らしとはこの事！ さっそく彼女達の卒論を読み、私と共に感覚統合訓練を行っている当の本人である理学療法士のグニツラ・ハッセルグレンに意見を聞いて見た。

スウェーデンのリハビリとペトウー教育の相違を調査して、スウェーデンでもこの教育が可能かどうか考えてみた、と言う。ムルバック氏の批判はそのまま両親の声だとも肯定する。ただ彼女がインタビューしたどの両親もスウェーデンのリハビリを全面的には批判していない。モダンなテクノロジーの補助は必要不可欠だし、だからといって障害を持つ我が子には歩行可能になってもらいたい。両方が手を取り合ってリハビリ出来ないものだろうかというのが両親の正直な願いだそうだ。グニツラが言うには、我々が持って居る力を集中させて訓練をすればペトウー方法と同じ効果は必ず出るはずだそうだ。

ただ現在のシステムでは不可能に近いとグニツラは断言する。数年前、ペトウー教育を取り入れようとして彼女は失敗したという。原因は両親の不参加にあったそうだ。ハンガリーまで休暇を取って集中訓練を受けるのは、両親も参加するのは当然であり、旅行気分での日常の生活環境も変わる、また短期間という時間制限があるため訓練に対する精神的意欲が違うそうだ。確かに、赤ちゃんの頃から見飽きる程通っているハビリテーション・センターで新鮮な意欲を持ってと言っても無理なのかもしれない。また、集中訓練を始めても果たして仕事を休んでまで両親は参加するだろうか。国民保健は出るだろうか。学校は休めるのだろうか。問題はいろいろ出てくるらしい。

でも、理学療法士も作業療法士もこのペトウー教育を見習うべき所は大きいとグニツラは言う。

育訓練方法を二カ月受けた後、歩行、衣服の更衣、食事動作が可能になり、これまで自分がスウェーデンで受けて来た訓練は何だったのだと強烈な疑問を投げかけたのです。

この訓練法はアンドレ・ペトゥー氏によって1940年に開発され、動作を強制訓練すれば未開発の脳が成長して、日常生活に必要な作業動作が可能になる、といったものですが、東欧に見られる兵隊的な強制訓練方法に個人の主張を尊重する西欧諸国は追いつけず、またそれほどの効果も上がらないのでそのまま下火になっていたものです。

ところがムルバック氏の他にもマリアという五才の女の子が訓練を受けた時、ローラーを使用してですが歩行可能になり、この車椅子からの目を見張るような脱皮をムルバック氏はドキュメントに収め、スウェーデンのテレビで放映したのです。さらにムルバック氏の仇討ちとでも称せる自分自身のドキュメント、ハビリテーションでは補助器具とパーソナルアシスタントに頼って生活していた彼自身が全て自立して出来るようになったという成功物語を放映したのです。その中で彼は怒りながらスウェーデンのリハビリは間違っていると戦線布告したのです。

これについて医療界は否定も肯定もしませんでした。障害を持つ人々やその家族にとっては一筋の藁をも掴む気持ちでムルバック氏の一言に影響されたのは言うまでもありません。マスコミは更に、大々的に取り上げ、スウェーデンは補助器具やアシスタントを利用するリハビリで人間の持っている可能性を伸ばすものではない、と言うムルバック氏の指摘を肯定しました。今年になってからは、ペトゥー教育訓練法の一部を担う西欧諸国に合わせた新しい訓練法を行う MOVE&WALK 施設を私設ですがネッショー市に設立して、希望者を募り始めました。

私は彼のドキュメントに興味深く見ましたし、マスコミでの議論も注意深く追ってきました。ムルバック氏の主張にも確かに一理あります。それは私が常々訓練に対して子供達がともすれば受動体になると感じていた事を肯定してくれたからです。でも、私のように他国のリハビリ状態を知っている者にとってムルバック氏の言葉には心底賛同出来ないのです。というのもハビリテーションセンターの目標に、人間の尊厳を第一に掲げ、環境をハンディに適應させてあげれば、ハンディがハンディにならず、他の人と同等の権利で日常生活が営めるとしてあります。これは車椅子の人が食器棚に手が届かない場合、食器棚を上下移動可

能な電動式に変えたりすることで、スウェーデンではこういう住宅改善や補助器具のサービスが行き届いており、障害者の方達が快適に過ごせるよう心掛けているわけです。往々にして他諸国では人間が環境に適應するよう強いられています。適應出来ない人間は社会から疎外されて孤立を強いられます。でもスウェーデンでは環境を弱者に適應させて、積極的に社会参加が出来るように努めています。確かに環境がよければ人間はそれに甘んじて怠惰になってきますし、いかにして能動体の姿勢を維持出来るかが問題になってきます。それでも、私は社会環境を障害を持つ弱者に適應させるように手を差し伸べるのが、我々健康者の義務だと思うからスウェーデン方式が間違っているとは思えないのです。

ムルバック氏は今回、自分が受動体になった原因をハビリテーションの訓練方法が間違っていて、自分は長い間騙されていたと痛烈に批判しました。これを聞いた時、以前ムルバック氏が映画監督デビューしたときのニュースを思い出しました。その時彼は、日常の作業動作は訓練しても時間の無駄だから全てをパーソナルアシスタントに任せて、自分は映画を造るのに専念したいと言っていました。ハビリテーションでは当人の自己選択を尊重します。当然ムルバック氏の意見も尊重されて、訓練は二の次だったと思います。彼が重度障害者でありながら、自分の希望する教育を受け、また経済的援助を受けられる可能性がここにはあったからです。それが今回、ペトゥー教育訓練法の発見と共に、訓練への動機に火がついたのでしょう。ドキュメントでも見られるように、彼は個人別の特別訓練を受けています。朝から晩まで一日中マンツーマンで、苛酷な訓練をこなしています。

彼がこれほどまでに自立出来たのは、第一に彼自身の努力と自分自身の身体の仕組みを発見する事であったのだと私は思います。もちろん、彼にその動機を与えたペトゥー教育訓練方法をも賞賛致しますし喜ぶべき事でしょう。しかし、ムルバック氏の批判は、障害者福祉を一步後退させる危険性をも含んでいると私には思えてなりません。現在、そうでなくてもあらゆる福祉行政面での支出を削るように政治家達は、圧力をかけています。ムルバック氏の言うようにパーソナルアシスタントや補助器具は患者を受け身にするので控えたほうが良いとなると、一挙に予算を削減されてしまいます。実際にそれらの援助が必要な重症者にとっては、明日への生活の自由を奪われるのも同然です。それでは福祉のタイムバックになってしま

果たして本当に不可能なのだろうか。なんとかコンビネーションできないものか。ハビリテーション内でも至るところで議論が進められた。

ヘッドチーフは両親や子供がペトウー教育を望めば、与えられる可能性がここにはあるべきだという。そして、ペトウー教育をどのようにしてハビリテーション・センターに浸透させるかというその方法を見当するのが第一でそのためにプロジェクトグループが編成された。今年の秋からは、集中訓練をスタートしたいというのがみんなの意見である。今までの方針を全て変えるのではなく、多額の金額を使用しなくても、ペトウー教育の中

心でもある集中訓練を受けられる、その選択が出来るという可能性から始めることにした。私もそのプロジェクト・グループに加わっている。興味深いことだ。

なお、ムルバック氏の推薦する Move & Walk は、営業上の問題から3月に訓練開始が延期された。スウェーデンの医療変化もそのうち見られるかもしれない。

聞くところによるとペトウー教育を行っているところが、世界各国にあるそうだ。日本にもあるらしい。誰か知っている人があれば、私に教えて欲しい。



KULTUR KLIPPET

「毎週40クローナの新書」は、1998年3月17日付け Dagens Nyheter 紙の Veronica Ahlström の記事の見出しである。彼女はこう書いている。

3月19日木曜発売予定の「今週の本」は40クローナで60ページ、書店以外のあらゆる場所で販売される予定である。「今週の本」の意図は、著名なスウェーデン作家が毎週新しく書き下ろした短編を発表するというものだ。今年中に Torgny Lindgren, Bodil Malmsten, Klas Östergren, Agneta Pleijel などの作家が作品を提供する。

Högmans 出版社のプロジェクト責任者 Lennart Högman は次のように述べた。

「『今週の本』は過去数十年の出版界にそして読者にとって最高に出来事である。この企画はスウェーデン新刊書にとって新鮮でかつ独自性を持ち、変化を意味するものだ。」

「新しく書き下ろされた文学作品はいわばナマモノであり、そのために毎週木曜日新しく発売されるのである。価格設定は新作小説に払う額として読者自身の判断によるものである。これらを20クローナで売り出すこともできたが、それすれば読者は本が古い売れ残りだと判断するだろう。」

「今週の本」は Högmans 出版と ABF の共同企画による。出版社は彼らの事業をスウェーデン人国民の読み書きの能力を上げるためのいわば教育事業と考えている。これらの本は手始めに Konsum (スーパーマーケット)、ガソリンスタンド、郵便局、列車 X2000 そしてスカンディナビア

航空ニューヨーク周便の機内などに置かれる。発行部数は一週間でほぼ一万部になる予定だ。

政財界へのコンタクトを取り付け、この事業実現に貢献した Bengt Norling は言う。

「ターゲットは本が高すぎると思っている人や本を読む時間がない人である。時間に追われるビジネスマン、シングルマザー、学生そして教師などなど。そのほかこの企画では、書店や図書館では自宅にいるときのようにリラックスできない人々にも焦点を当てている。」

文学界アドバイザーであり、作家でもある Kurt Salomonson は次のように述べている。

「『今週の本』は様々な社会現象に対する意見や態度を示すものであるべきだ。できれば情熱的な思い入れで書かれたものが望ましい。」

Salomonson が今年のクリスマスに40人余りの作家に連絡を取った際、うち14人が即座にアイデアに賛同し書き始めた。最初に出版される4作品は、Jan Myrdal の 'En Kärlek (一つの愛)'、Anita Salomonsson の 'Mannen på myren (湿地の男)'、Torbjörn Säfve で 'Eldringen (炎の輪)' そして Ove Allansson の 'Frysarns värme (凍らす男の温もり)' である。

※Kultur Klippet は、スウェーデン外務省によるスウェーデン文化関連のスウェーデン語のニューズレターです。

(翻訳：山下亜紀)

Japan Calendar

カイ・レイニウス 報道参事官

1998年11月号

大使館ホームページ完成

長らく取り組んできた大使館ホームページがついに完成した。海外におけるスウェーデンの公的な代表組織はすべてホームページレイアウトに共通基準があり、その関係で制作にかなりの時間を要した。しかしながら、ついにスウェーデンと、在日スウェーデン大使館の活動に感心のある人金でとの新しいコミュニケーションの手段を提供できる運びとなった。

アドレスは <http://www.twics.com/~swedemb/>。またジャパンカレンダーの英語版・日本語版ともに、インターネット上でも掲載される。さらにスウェーデンの基本情報、スウェーデン関連組織、その他日本およびスウェーデン国内の団体、重要なリンク等の情報も含まれており、大使館およびスウェーデン情報提供に役立つ内容となっている。ME/kr

ME: 本館

tel: 5562-5050

fax: 5562-9095

CO: 商務部

tel: 5562-5000

fax: 5562-9080

STO: 科学技術部

tel: 5562-5030

fax: 5562-9090

home page:

<http://www.bekkoame.or.jp/>

~Tokyo/

ISA: 投資部

tel: 5562-5014

fax: 5562-5130

行事予定

11月

26日

スカンジナビアン・コネクション98

大使公邸にてモダンジャズコンサートが開かれる。演奏は長年スウェーデンに在住の森素人氏(ベース)や、Lara Jansson(ラッシュ・ヤンソン、ピアノ)ら。(招待客のみ)コンサート後に軽食。

時間: 19:00

場所: 大使公邸

ME/kr

26日

スウェーデン映画の夕べ
“Picasso's Adventure”

スペイン人画家ピカソの人生を描いた1978年制作のコメディ映画を上映する。監督は Hans Alfredson (ハーンズ・アルフレドソン) 出演は Gosta Ekman (ヨスタ・ユークマン)、Margaretha Krook (マルガレータ・クルーク)、Hans Alfredson ら。スウェーデン語・字幕なし
時間: 17:00

場所: 大使館オーディトリウム
ME/rk

29日

“アドベント” ミサ

伝統的なスカンジナビアのアドベントミサが日本キリスト教団渋谷教会で行われる。ミサの後には“チャーチ・コーヒー”軽食が振る舞われる。お問い合わせは Tel: 3407-7018 まで。

時間: 17:00

場所: 渋谷 2-4-12

ME/kr

30日

スカンジナビア教会委員会
スカンジナビア教会委員会と小委員会の合同会合が大使館で行われる。

時間: 10:00

場所: 2階会議室

ME/kr

12月

2日

日本スウェーデン青少年友好協会の集い

日本スウェーデン友好協会がスウェーデンについて学ぶための集いを香川県大内町開催する。カイ・レイニウス報道参事官が出席し、スウェーデン紹介の公演をする。

ME/kr

5日

JISSS “ロシア祭”

ロシア祭が JISSS (スウェーデン社会研究所) およびスウェー

お詫び: 急遽中止になりました。
誠に申し訳ございません。

時間: 17:00-18:00

場所: 千代田区丸の内 2-2-2 三井ビル 4階 トーモク会議室

ME/kr

9日

“Law and Business in Japan”

EIJS (欧州日本研究所) 主催レクチャーシリーズ今回のテーマは“Law and Business in Japan”。

詳細は EIJS 東京事務所 長谷川氏まで。Tel: 3591-0770, Fax: 3591-0776

時間: 18:00 (軽食) 18:30-

21:00 (セミナー)
 場所：大使館オーデトリウム
 ME/kr
 10日
 スウェーデン映画の夕べ“Such is Life”
 30代を目前にして危機を感じる
 バー・ピアニストの女性が主人
 公。監督は Colin Nutly (コリン
 ・ナタリー)、出演は Helena
 Bergstrom (ヘレーナ・ベリス
 トレム)、Lena Nyman (レーナ
 ・ニーマン)、Sverre Anker
 Ousdal (スヴェッレ・アンケル
 ・オウスダル)、Jacob Eklund (ヤ
 コブ・エークルンド) など。ス
 ウェーデン語・字幕なし
 時間19:00
 場所：大使館オーデトリウム
 ME/kr

12日
 SWEA クリスマスバザー
 毎年好評の SWEA クリスマス
 バザーが今年も開催され、会場
 はスウェーデンの“jul(クリスマ
 ス)”の雰囲気にも包まれる。スウ
 ェーデンのクリスマス料理、し
 ょうがクッキー、お酒、クリスマ
 スデコレーションなどの他、お
 待ちかねのロシアの行進もある。
 時間は12時、13時、14時の3回。
 時間：11:00-16:00
 場所：大使館展示ホール
 13日
 神戸・ロシア祭
 伝統的なロシア祭が、スカンジ
 ナビア人コミュニティやその
 他関心を持つ人のために神戸ク
 ラブにて開催される。
 時間：15:00

場所：神戸クラブ
 ME/kr
 14日
 関西スウェーデン人ビジネスマ
 ン年次大会
 神戸市の神戸クラブにて、例年
 の通り会合が開かれる。
 時間：13:00
 場所：神戸クラブ
 23日
 クリスマスマサ
 スカンジナビアのクリスマスミ
 サが大使館にて行われる。興味
 のある方は誰でも参加できる。
 ミサの後軽食あり。
 時間：18:00
 場所：大使館オーデトリウム
 展示ホール
 ME/kr

～Information～

☆「スウェーデンからの報告'98」「ロシア祭♪」

日時：12月5日(土) 15:00～16:30 (第1部)

第1部：

お詫び：急遽中止になりました。誠に申し訳ございません。

と見よう“オ

第2部：

による歌、行進など様々なイベントを含め行います。

ンの子供達

参加費：500円/会場：トーモク会議室 (丸ノ内三井ビル4階)



☆冬学期スウェーデン語講習会

1999年1月20日(水)より始まります。

基礎コースから時事そして通信添削を含み全7コースです。

詳細をご希望の方は、80円切手同封にて下記までご請求下さい。

☆ダーラナ地方の夏至祭の絵はがきを販売中!!

右の愛らしい写真を含めカラーとセピア色全12種類揃えております。(1枚200円)

☆99年版カレンダー予約受け付け開始

スウェーデン・レクサンドにある Sverigealmanackan 社より直輸入のカレンダー、
 (A3サイズ壁掛け¥2,500/A6サイズ卓上型、¥1,500)を販売しており
 ます。

※上記すべての詳細につきましては、下記までお問い合わせ下さい。

〒106-0032 東京都港区六本木6-11-9 スウェーデンセンタービル5階

(社)スウェーデン社会研究所

Tel: 03-5412-0503 Fax: 03-5412-0549 (月～金10:30～17:30)



☆モダンジャズコンサート「スカンジナビアコネクション98」

森泰人氏が昨年に引き続き日本ツアーを行います。

東京の日程をご案内いたします。北欧のジャズをお楽しみ下さい。

日 時：12月5日(土) 19:30-24:00

会 場：ホディー&ソウル 港区南青山6-13-9 ANISE 南青山B1

連絡先：Tel/Fax: 03-5466-3348

大使館の催しより

木村浩子氏回顧美術展によせて

H. アオ

スウェーデン在住の日本人画家は何人位いるのだろうか。寡聞にして現在私は、我が友太陽の画家の異名をもつ中島由夫氏（近年は半年スウェーデンに在住し残半年は日本で活躍をしている）と木村浩子氏の2人しか存じ上げません。

実は私も木村浩子氏の存在については、今回の大使館の回顧展があるまで恥ずかしい話ですが、全く知りませんでした。

そういった私のようにかなり美術界に通じていると自負している者でさえ、知らないような日本出身の方が何人か或いは何十人かいるのではないかと思うと、それらのスウェーデンで活躍しておられる方々の絵や彫刻、版画、編物等、アートを一同に会した展覧会を開かれるのは日瑞両国の親善のためにも、又、個人の今後の発展のためにも意義のあることではないかと考える次第であります。

僭越ではありますが、一度大使館におかれてそのような企画展を開催していただければと、スウェーデンを愛する美術愛好家の1人として是非実現を切に願うものであります。

前置きが長くなりましたが、以下木村浩子氏の回顧展を見ての感想を述べさせて頂くとしましょう。

油、水彩、コラージュ30点とストックホルム大学の学生による「書」がありましたが、特に眼についたのは、水彩画の抽象的色彩の美しさであります。どの絵も淡い感じではありますが、しっかりと原色の絵具が画面に定着していて、書道的筆使いではありますが各色それぞれ個有の色彩の美しさを透明感のある筆趣で簡潔に描き出しています。その原色のハーモニーが調和し一体化して淡いソフトな日本の女性ならではのイメージを画面の上に結実させています。

その色彩の輝きと余白を生かした構成によってどの絵も情緒的繊細な優美さを保っています。油絵は主として揮発性油を溶油として使用して描かれているように思われます。そのせいかやはり水彩画の延長上に位置する作品のようであります。ただモチーフにおいて水彩画の感念的描写に比べて、勿論、形体として例えば横に引き伸ばされる等、デフォルメされていますがオブジェの具象的形体がまだ強く感じられますので、やはり具象性の強い描写であると考えられます。しかし、色々な物が描かれている点面白さが感じられます。

前述したように水彩も油彩も同感覚の東洋的淡泊さではありますが、物の組み合わせによる構成上の特に油彩画の大作においてはエネルギーの弱さが感じられます。

それは、書道家の持つ精神的宿命から来るものかも知れないと考えても見ましたが、半面墨の黒の強さを利用して例えばミローのごとく象徴的なエネルギーに富んだ絵も描けるのではないかと考えられます。油絵は体力、精神力の充実を要するため、本質的には外国人作家連に体力的には及ばないかも知れませんが、精神的には同列あるいはそれ以上であると考えられるので、繊細な優美さは水彩画に止めて、もう少し、油彩と取り組んで健闘せられてはどうだろうか。折角墨を駆使しての墨を生かす道を極めておられるのだから。

そうすれば木村画伯個有の素晴らしい油彩画と言おうか墨（水彩も含めて）をミックスした所請ミクスメディアによる興味深い作品が創造出来るかも知れません。

これは私の考えであり余計なお節介かも知れません。もしそうであったとしても芸術の創造をより深めようとせられるのであれば私の独白もご考慮下されば幸いです。

《 書籍 紹介 》



あなた自身の社会 ①

ヤン・ウェステル 著
アーネ・リンドクヴィスト 著
川上邦夫 訳
新評論

本書は、中学二年生、一四歳の少年少女が、現実のスウェーデンの社会とはどんな社会かを学ぶための教科書で、「法律と権利」「あなたと他の人々」「あなた自身の経済」「コミュン (市町村)」「私たちの社会保障」の五章から成り立っています。

一三歳から年令とともに増大する法的権利と義務、消費者としての基礎知識、コミュンの行政と住民の役割、社会保障制度とその内容が、豊富で生き生きとしたエピソードを通して平明に解説されています。いじめ、恋愛、セックス、結婚と離婚も取り上げています。一方、暴力と犯罪、アルコールと麻薬、男女間の不平等、社会的弱者や経済的・社会的に恵まれない家庭の存在など、いわば社会の負の面も隠すことなく紹介しています。

そういう社会で健全に、賢く、そして積極的に生きていくためには何を知っていなければならないか。著者はその一つとして、君と同じように、人は誰でも周囲の人々から強い影響を受けている、自分に自身を持っていない人は少なくない、人生の目的を見つけれないでいる人も多い、それと同時に君と同じ考えや趣味を持った人も大勢いる、を指摘しています。一人立ちしはじめたこの年代の子どもたちには、適切な助言と言えましょう。

生き生きとした感情を持った人間が登場しない、「事典」のような日本の中学社会科教科書「公民」と比較するとき、本書の性格は一層はっきりと見えてきます。本書は「市民」を育てる教科書なのです。

スウェーデンの学習指導要領は、義務教育の目標として、民主主義の価値観を持ちそれを実生活で実践できる責任感のある市民の育成、をあげています。また、学校の任務は次の世代に対して、彼らが築く将来への楽観的な展望を与えることである、とも言っています。本書は、それに必要な人間性についての多面的理解、人間に対する信頼感、自己の発見と批判的精神の育成を目指しています。

日本には、「社会」を教えるこのような教科書はこれまで存在しませんでした。本書から私たちは、子どもたちに「社会」の何を、どう教えるかについて、深く考える契機を与えられることでしょう。

(かわかみ・くにお)

定価 2,310円→2,100円 (割引価格)

川上邦夫：著述業。スウェーデンの地方自治・教育問題をテーマとした執筆・翻訳に従事。著書にスウェーデンの田舎町で公立の小学校へ子どもを通わせた体験を書いた『シュルク・スクーラン1年生』(民衆社、1994年)がある。



恋愛と結婚 ②

生命線 第一部
エレン・ケイ
小野寺 信/小野寺百合子訳
新評論

エレン・ケイが『恋愛と結婚』を出版してからまもなく100年になるが、当時この本は本国スウェーデンでは、封建的上層階級と教会からひどく反発され、ほんの一部の人々を除いては轟々たる非難を浴びせられた。ところが、ドイツおよびイギリスとアメリカのインテリ層には天下の名著として歓迎され、まずドイツ語について英語に訳されてもはやされるとともに、たちまちその他の数ヶ国語に訳されて、世界に普及した。日本には逸速くドイツ語からと英語から転訳されて、当時の日本の婦人運動の一つの教科書として用いられた。平塚らいてうも『青踏』に翻訳を連載したが、完訳にはいたらなかった。

そこで『恋愛と結婚』の内容であるが、エレン・ケイは、当時まだヨーロッパ社会を支配していた封建的保守的な性道徳の概念を真っ向から攻撃して、恋愛にしろ結婚にしろ、人間本来の自然のままの感情ないし感覚をもって行動すべきであり、それを封建時代からの慣習や教会の教義で縛り、動きのとれない状態を強いるのは許されないというのである。彼女によれば、男女の結合が許されるのは双方に恋愛感情が高まったときのみであり、それでなければ良い子孫は生まれえない、民族繁栄のためにも、基本は純潔な恋愛であるという。当事者の意向を抜きにして親族その他によってアレンジされる結婚の不当性を説くと同時に、神の前で永遠の愛を誓い合った二人であっても、恋愛は冷めることもあり、他に新しい恋愛の芽生えることもあり得る。その時に絶対に離婚を許さないというのも不合理であると説く。ただし二人の間に既に子どものあるときには、離婚は軽々しく決めてはならないとケースバイケースの説明をしている。その上で、不倫は厳しく戒めている。

エレン・ケイは女権拡張の女性運動家でもあったが、決して男女平等権は主張しなかった。その頃の日本もそうであったが、既婚女性すなわち妻には、自分の財産管理権すらなく選挙権もなかった。彼女は既婚の妻にもそれらの権利を得るための運動をしたが、彼女は女性には男性とは違う母性という大切な役目のあることを強調したのである。そして、最後に新しい結婚法を提案して、項目を挙げている。

(おのでら・ゆりこ)

定価 3,990円→3,700円 (割引価格)



視点をかえて 自然・人間・全体

B.ルンドベリィ+K.アブラム＝ニルソン
／川上邦夫訳
新評論

21世紀は、なによりも地球環境問題を解決しなくてはならない世紀となるだろう。限り無く多様で複雑な現象をともなう温暖化への対応、全ての問題の根源である廃棄物の処理、そして地球の表面をおおう水、表土、森林の保全。これら全ての課題に有効な対策が、いま求められている。

著者は、この課題への一つの解答を提示しようとしている。我々が今日生きているこの世界は如何なる世界であるか、の検討を通じてである。本書は、その膨大な数の検討項目と、著者が獲得した理解を集成したものである。表題が示しているように、著者は「視点をかえて」自然を見直し、人間を見直す。『全体』としての自然と人間の総和の中で、その永続的な協調関係のあり方を考察する。

「視点をかえる」ことによって、我々の日常生活を支配しているいわゆる西欧文化が、いかに太古より存在し続けた自然システムと不調和をきたしてきたかが見えてくる。今日の産業社会の基盤を支えている「生産と消費のイデオロギー」が、本質的に自然システムに敵対するものであることが見えてくる。

太陽エネルギー、光合成、水の循環、炭素の循環、エクセルギー、熱力学の法則など、自然システムの核心をなす現象や原理がもつ、人間を含む全ての生命にとっての意味が、新しい光りのもとに明らかになる。これらの事実を正しく認識することから、新しい人間社会への展望がひらける。

こうした視点から生まれた本書の特徴の一つは、一連の考察において、人文科学、社会科学、自然科学の、最も基礎的な知識にのみ依拠しているということである。それらは、我々の誰もが中学、高校で学んだものだ。これらを駆使して著者は問題の本質に迫っていく。「正しい疑問には、答えの半分が含まれている」と著者は言う。読者は、議論が常に本質に触れている、という感覚を味わうだろう。

このように本書は科学の書であるとともに思想の書である。太陽系のオアシス、生命の惑星地球の、その生命が直面している危機に立ち向かおうとしている一人の人間の、誠実な努力の記録でもある。著者の語りかけは、ときに詩のように響く。

(かわかみ・くにお)
定価 2,310円→2,100円 (割引価格)

著者：Bo Lundberg。自然環境保護運動活動家、著作家、元テレビプロデューサー。

Kerstin Abram-Nilsson。版画家、グラフィック・アーティスト。国立美術・工芸・デザイン大学教師。



スウェーデン・ 超高齢社会への試み

—変わりゆく制度 変わらない理念—
ビヤネール多美子 著
ミネルヴァ書房

母を通して見たスウェーデンと日本の高齢者福祉
著者の、79歳になるスウェーデンの姑は彼女自身の選択で、庭の広い一軒家の自宅にすみ、赤い車を乗り回し、ブリッジに興じる生活を楽しんでいる。彼女が考える次のすまいは、シニア住宅。便利で住環境のいい所に建てられる高齢者向けのマンションである。福祉に関して、人権をベースに壮大な実験を繰り返してきたスウェーデンは今後どこへいこうとしているのか。1964年以来両国を行き来し、スウェーデン在住の著者が、単なる福祉制度の解説ではなく、その根底に流れる共通の理念を生活者の立場から紹介する。いままで、障害者や子どもの問題に深く関わってきた経験と、日本の老人ホームで自分の母親を見送った体験をふまえ、体系的にまとめたスウェーデンの高齢者福祉の現状。

著者紹介：ビヤネール^{たみこ}多美子

1935年東京生まれ。津田スクールオブビジネス卒業。ストックホルム大学卒業。スウェーデン大使館勤務を経て、1964年スウェーデンに渡る。

1970年から日本に住み、1987年再びストックホルムに戻る。現在フリーランスジャーナリストとして福祉問題に早くから関心をもち、スウェーデンの障害者や子どもへの取組みなどを多く紹介してきた。

主な著書：『スウェーデンの性教育と授業革命』『ともだちたくさんできるかな』『イサベルのふたつの家族』など。共著に『更年期を生きる』『世界の女性たちはいま』『北欧が見えてくる』『スウェーデンハンドブック』ほか。翻訳書：『感染』『大国日本の悲劇』『指で見る』など多数。

定価 2,940→2,700円 (割引価格)

書籍の講読方法について

ここでご紹介している書籍のうち①～④は、会員の方々には割引価格にてご購入頂けます。また、⑤はスウェーデン大使館にお問い合わせ頂くことも可能です。送料は、別途頂戴致します。

ご注文は、購入を希望される書籍をお電話、ファックスでご連絡下さい。

書籍の代金が、送料を含め1万円を超える場合には、前払いをお願いいたします。

書籍の代金のお振込は、郵便振替にてお願い致します。



北極圏からの手紙 ③

山内正敏 著
鉾脈社

北極圏は「極端な気候」の外に「珍しい現象」も豊富だ。それは人間の知的好奇心、芸術的感性を刺激する（著者）。——スウェーデン国立スペース物理研究所研究員として、北極圏に定住する唯一の日本人科学者が、現地の自然、生活、文化を題材に自在につづった、魅力あふれる一冊。現代文明へのユニークな批評ともなっている。山内氏は、スウェーデン大自然紀行の講師としてご存じの方も多いと思います。美しいスウェーデンの自然現象の写真が載っています。多彩な経験をもとに書かれたエッセイをお楽しみ下さい。

定価1800円→1,620円（割引価格）



ひかり ⑤

Vol.4 No 1 (1998)

『ひかり』は日本でスカンジナビアの文学を、スカンジナビアで日本文学を広め、その知識を増大することに少しでも貢献することを明確な目的に掲げて創刊された文芸誌です。『ひかり』はそれぞれの文学が原典から翻訳された作品を掲載しておりますが、本誌はそれぞれの国の文学の領域を扱った論文を締め出すものではありません。またフィンランド文学に関しては、日本語に翻訳されたフィンランド文学は掲載いたしますが、フィンランド語に訳された日本文学は扱わない方針です。

（写真：編集及び翻訳者であるラーシュ・ヴァリエ公使）
（現在は、リトアニア大使）

定価 1,000円



Excellent SWEDEN CARING ④

今、日本はさまざまな問題に直面しています。経済、環境、教育、そして高齢者福祉……スウェーデンも過去において現在の日本と同じような問題を抱えていました。その時、国を揚げて理念の統一を計り、人間の生活を第一に考える「生活大国」の基盤を築いたのです。

エクセレント・スウェーデン ケアリングは、さまざまな視点からスウェーデンを紹介しています。

特集・子供社会では、親と国が考えなければならない教育方針、学ぶということは何かを問い明かしながら、日本の子供との意識の違いを浮き彫りにしています。

そして、経済では、スウェーデンの多国籍企業を紹介。スウェーデン企業の強さの秘密、そのバックボーンを探り、スウェーデン式経営学の核心に触れています。

更に、誰もが豊かに暮らして行くための社会福祉の在り方、仕事を社会参加への情熱として捕らえている女性達の生き方、雄大な自然に囲まれ、生活を楽しむとは何か……。

豊富な内容を盛り込んだ「ケアリング」。そこに現在の日本が、これから先どのように進むべきかの一つのヒントが見い出せます。

本のタイトルのとおり、すべてのことに気遣える人間社会になるように、そして子供達が大人になった時も地球はすばらしい輝く星であるように……。そういう願いがこの本に込められています。

販売/（株）紀伊国屋書店

定価 1,500円→1,350円（割引価格）



北歐の外交 ⑥

一戦う小国の相克と現実—

武田龍夫 著
（東海大学文学部北歐文学科 教授）
東海大学出版会

スウェーデンを中心に、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、アイスランドの北欧五カ国の近世外交史を、著者長年の外交官としての視点から描く。日本で初めての北欧外交史であり、現在進行中のEUにおける北欧5カ国理解の視点も提供する。

近代北欧（1800～1995年）の外交史

ナポレオン戦争で小国として苦汁をなめたスウェーデンは、カール14世ヨハン（1818～1844）の治下、中立・非同盟政策を国是とする。以降、デンマークのシュレスウィヒ・ホルスタイン戦争、フィンランドの冬戦争、第1次世界大戦、第2次世界大戦を通して中立政策を貫く。しかしドイツ、イギリス、ロシアなどの周辺大国のパワー・オブ・バランスの中で、小国が中立・非同盟政策を貫くことは、相克と苦汁に満ちた戦いであり、同胞諸国のデンマークやノルウェー・フィンランドの犠牲の上になった選択でもあった。

武田龍夫：1928年北海道に生まれる。1952年中央大学法学部卒業後、一時NHK放送記者を経て、ストックホルム大学留学。その後、在スウェーデン大使館、外務省北欧担当官、在デンマーク大使館、宮内庁式部官、イスタンブール総領事などを経て、現在、東海大学教授。著書に『住んでみた北欧』『新月旗の国トルコ』『新宮中物語』『アウシュビッツ幻想紀行』（以上、サイマル出版会）、『白夜の国ぐに』『物語 北欧の歴史』（以上、中公新書）、『北欧——その素顔との対話』（中央公論社）、『愛の伝説』（編訳、東海大学出版会）、『スウェーデン語日本語辞典』（共著、大学書林）などがある。

定価 5,250円

エレン・ケイ 『児童の世紀』 から100年

The 100 Years from “The Century of Child” (by Ellen Key)

白鷗大学教授 荒井 洸

Prof. Kiyoshi Arai

本稿は、連載の第2回めである。「その2」のタイトルを、どうしようかと考えた。

子どもを育てあげた者なら、だれもがうなずいてくれるタイトルにすることにした。すなわち、「子どもの成長と家庭の持つ意味」である。

『児童の世紀』の第2部第5章は、「家庭の喪失」となっている。現代にくらすわれわれとしては、ハッとするタイトルである。この章を中心にして、エレン・ケイの家庭についての考え方を辿ってみることにしよう。

その2 子どもの成長と家庭の持つ意味

○よい家庭は楽しいものだ

“家庭”とは、生まれてくる子どもにとっては、運命的に与えられるものである。そして、たまたま与えられた家庭によって、人は家庭像というものを無意識のうちに作りあげていく。つまり、この原稿に目を通しておられる諸兄姉も、それぞれ互いにニュアンスを異にする家庭像を描いているはずなのだ。

エレン・ケイは、「よい家庭は楽しいものだ」として、理想とする家庭像を次のように描いている。一目してすぐ分かるように、箇条書き風に書き写してみることにしよう。

「そこでは愛情は健全で、決して感傷的ではない。」

「そこでは行儀や整頓の細部で、つまらない説法をしたり、意地悪をするようなことはない。」

「そこでは男の子が滑稽な話をしたり乱暴な言葉を使ったりしても、母や姉たちが下品だといって叱らない。」

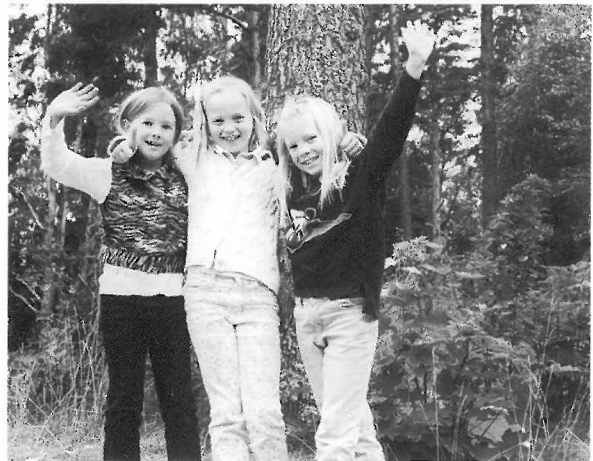
「そこでは頹廢的な冗談や、時弊を大言壮語して論じたりすることはない。」

「そこで支配的なのは、新鮮さであり、虚飾のなさである。これは、その家庭の女性メンバーの心の清らかさと素朴さが一体となって、何ものにも換えがたい美点となる。」

「そこには和合があり、老年者と若者が労働も娯楽も読書も雑談も共にし、一度は若者が、次には老年者が音頭取りをする。」

「そこは若い友だちのために開放された家であり、そこにはかれらが思いのままに楽しく遊ぶ自由があるが、すべては素朴で、このような催しのために家庭の習慣が変わることがない。」

いかがだろうか？エレン・ケイが描くあらまほしき家庭像は、きわめて具体的で、素朴である。19世紀後半、日本で言えば明治前半に該当する時代の、北欧の田園や湖畔や海岸などで質素にくらす、実直な人びとの姿が思い描かれてくるのではないか。ああ、失われし牧歌的な家庭風景よ……。



スウェーデン・トロサ (Trosa) のフリータイムホーム (学童保育所) にて。緑に包まれた空間が実によい。

○子どもと親との関係は同格

「大人が子どもを尊重することは、子どもに他人を尊重するように教えるのと同様に必要である。」

「相対的自由は子どもに完全な自由の使い方を教えるが、禁止と統制は人間を不誠実にし、かつ虚弱にする。」

「親は子どもに、自分の仕事と自分の努力と自分の力のほどを見せるように生活し、かつ行動する。いやそればかりか、喜びも苦しみも、過ちも失敗も子どもに見せてやる。このような親はことさらにへり下ったり、または虚勢を張ったりすることなしに、子どもの協力を得、互いに思想と意見を自由に交換しながら、目立たないように子どもを教育する。」

すべては納得である。しかし、これらを実感をもって理解できるのは、かなりの苦労を重ね、かなりの苦悩をなめた後の、親としての存在である。

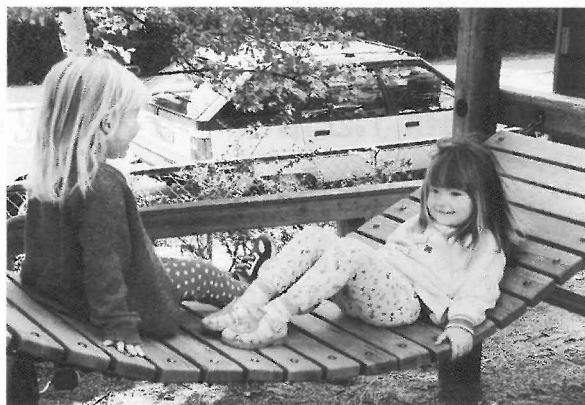
とにかく、『児童の世紀』の著者は、子どもと親とは同格であると主張する。すべては、このことを起点にして考えねば、子どもを巡る、求むべきフィロソフィーは瓦解してしまう。

「最も道徳的に強く、かつ澁刺たる労働力をもつ青年男女を世に送り出す家庭では、子どもと親との関係は仕事仲間であり、同格であり、妹あるいは弟と親切な姉や兄の間柄と同じである。」

○子どもを家庭に返す



スウェーデン・トロサ (Trosa) のフリータイムホーム(学童保育所)の建物。100年以上を経た、古い建物が生かされている。



スウェーデン・セーデルテリエ(Södertälje)の保育園にて。

「子どもたちが家庭にいるときでも、やれ宿題だ、やれ書取だといって、たまたま在宅する父親や母親と一緒に過ごす時間が妨げられる。」

「常に発展する社交生活、際限なく拡大する団体生活や家庭外生活のために、母親はなるべく早い時期から子どもを学校へやろうとする。」

エレン・ケイは、“家庭”というものに限りなく大きく、価値あるものを期待していたのだということが、これらの文章から読み取ることができるだろう。

○コラム風に…

小野寺信・百合子夫妻による、『児童の世紀』のスウェーデン語からの翻訳は、せんえつな表現ながら、まさしく労作である。訳文に苦労のあとがにじみ出ている。富山房百科文庫に収められた最初の版は1979年2月の発行だから、今からちょうど20年前ということになる。

ご夫妻は、たいへんな教養人であったから、さまざまな格調の高い語彙が訳語として使われている。しかし、すでにご高齢であったということもあってか、語調や文体が少々古風であることは否めない。

その1例として「婦人」という単語であるが、この言葉は本書の中で無数に使われている。これを「女性」という言葉に改めてみたら、いかがであろうか。それだけでも本書は格段にフレッシュな感じになり、若い人たちの目にも、さわやかな本として映ると思うのだが…。

※写真撮影＝澤田須賀子(大阪府堺市・竹宝保育園)

(次号に続く)